アルバ・パートナーズ代表

竹内明日香さん

子どもが海外で求められ、活躍する人材になるためには、どのような子育てが必要なのでしょうか。世界と日本を結ぶ企業コンサルタントとして活躍する竹内さんにうかがいました。

取材・文／田畑千絵　写真／モギヨシコ

たけうち あすか

企業コンサルタント。株式会社アルバ・パートナーズ代表取締役。8歳と6歳の男児の母。東京大学法学部卒業後、日本興業銀行（現みずほコーポレート銀行）にて国際営業、大企業向け融資、審査を担当。2006年から外国人向けに日系企業の情報提供をメインとした事業を開始し、2009年に国際化支援コンサルティング「アルバ・パートナーズ」設立。日系企業向けのステークホルダーマネジメント、財務戦略、事業戦略等コンサルティング業に発展。企業の訪問回数は累計500社以上。大学在学中にマッキンゼーにてインターン。日本証券アナリスト協会検定会員（CMA）。http://www.alba-partners.com

子育てしながら納得できる仕事環境を目指して

「子どもは男の子が2人、上が8歳、下が6歳で、現在、3人目を妊娠中です。以前は銀行で大企業向けの融資を担当していましたが、7時頃まで子どもを保育園に預けても、銀行では〝早帰り〟とレッテルが貼られてしまう。次の日に出勤すると、夜のうちにまったく違う内容のミーティングが行われていて、悔しい思いをしたこともありました。このままだと不満の残る仕事人生になってしまうと思っていた矢先、ベンチャーを興そうとしていた後輩に出会い、この会社の前身となるベンチャー企業を創ったのが会社設立のきっかけです。現在、メンバーは11人。そのうち8人がママです。小さい子どもがいる者が多いので、基本的に無理はせず、お迎えの時間には帰宅して家で仕事をする体制にしています」

将来、海外で求められる人材に子どもを育てるには？

海外で打ち勝つためにタフネスを身に付ける！

5歳から9歳まで、父親の転勤でニュージーランドで暮らしていたという竹内さん。現地に着いた翌日、いきなり小学校に1人置き去りにされたそうです。

「泣いても叫んでも誰も助けてくれない。当時は親をすごく恨みました。でも、そんなことがなければ今の仕事もできなかったわけですから、今は感謝しています。うちの子も含め、普通に日本で暮らしていると、そんな体験をすることは難しいので、せめて競争に打ち勝てるだけの体力と精神力を備えてほしいという思いがあります」

お兄さんはのんびりしているので、ほめて伸ばしながらもどこかで方針を切り替えようと考えていた竹内さん。一方、弟さんは生まれたときから負けん気が強く、むしろそれを抑えるのに大変だったとか。子どもの様子や状況を見ながら、タフネスを身に付ける時期を模索していました。

「社会に出て初めて、椅子取りゲームの椅子が実は1個だったりすることに気づきます。子どもたちに物心がついてから言うようになったのは、『1番かそれ以外。2番以下はビリと同じ』『100点かそれ以外』って。例えば98点取って惜しい！　のではなく、それじゃあダメだと。会社に入ったらその2点で×がつくし、小さなミスで取引先がつぶれることだってある。そういう2点だというのは分かるよねって。もちろん子どもが打ちひしがれているときには言いませんが、いい気になっているときは、特に厳しく言いました」

小さいお子さんに伝えるには少々厳しすぎるのでは？　その影響を尋ねると…。

「運動会前に『1番じゃないと意味がない』って、近所を自主的に走っていました。手を上げて発言しなければ授業参観に行かないと言ったら、最近手を上げているらしいので、そろそろ行ってあげようかと（笑）。でも最近はあまり理不尽なことを言うのもいけないことだと気づき、ほどほどにしています（笑。P15参照）」

お子さんたちはサッカー、水泳、テニス、バイオリン、弟さんはさらに体操、絵画を習っていますが、意外にも英会話は習っていません。

「英会話は必要を感じないと身に付かないもの。どこかで1カ月ほど海外に行かせ、日本語が使えない環境に身を置けば、自然にできるようになると思っています。それよりも今は筋肉やメンタルを鍛えるほうが大事（笑）。社会に出て思うのは、一番大切なのは体力ですよね。次に生まれる子が女の子でも、心身ともにタフで、自立した子になるよう育てていきたいと思っています」